
紅葉は

桜田 雛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅葉は

【コード】

N1810Y

【作者名】

桜田 雛

【あらすじ】

紅葉は

是非、見てください

1話

紅葉もみじは

今年も秋が訪れた。

僕はちらちらと木から舞い落ちる紅葉を見た。

手のひらには収まりきらない紅葉。

桜とは違う。

特別な紅葉。

僕は、はらおかゆきじ原岡行次。

高1である。

高校に入学したてだ。現在学校に登校中だ。

歩いていると、道端で桜の木を拾った。

僕は花が好きだ。

「立派な桜だなあ。・・・上から落ちてきたのだろうか。」

と、そう言っていると。

「君君々々！ちょっとそれ見して！」

と、ポニーテールの女性が走ってきた。

この人も桜に興味があったのだろうか・・・？と、思った。

「え！これって、陽光!？」

と、彼女は驚く。

「陽光っていうんですか？この花。」

僕は真顔で言った。

「君！私、陽光1度でいいから見てもたかつたの〜。
陽光は、天城吉野と寒緋桜との交配品種なのよ〜」
と、随分桜に詳しいみたいだ。

「ねえ、君名前は？」
と聞かれた。

「僕は西宮高校1年の原岡行次ですが・・・？」

「私は、三野由香里。あなたと同じ西宮高校1年
君、お花好き？」

三野さんは、僕の顔を覗く。

「ええ、まあ・・・」

「じゃあさ！！華道部に一緒に入ろうよ！
原岡君のことももつと知りたいしさ〜」

はい！それじゃあこれ入部届ね！じゃあね」と、
三野さんは学校へ向かった。

2話

三野さんが急に引き返し、僕の方に向かってきた。

「あ！君のことなんて呼べばいいの？」と聞かれて僕は驚いた。

「え、えーと・・・行次で・・・」

「わかったわ。よろしくね、行次君。

それと、1年何組？」

「B組です。」

「あら！じゃあ私と一緒に！それじゃあ、一緒に教室まで行きましょう」

と、三野さんは、僕の手を引っ張る。

「あ、それと、私のことは、由香里でいいから」といわれて、なんだかドキッとした。

恋愛感情というわけじゃない。ただただなんとなくドキッとしたのだ。

「・・・由香里・・・さん」

「な、なんだか照れるわね・・・」

由香里さんが照れている姿が僕には愛らしく思えた。

教室に着くと、僕は席についた。

鞆から、筆箱を取り出し、シャーペンを手に持ち、クリアファイルから、由香里さんからもらった【華道部入部届】を出す。

迷いはあったが、僕は入部届を書き、担任に渡すことにした。

「ほー。原岡は華道に興味があるのか。」

担任の若本は、僕の顔を見ながら驚く。

「はい。僕は運動ができないので」

「そうかそうかー。ま、華道部は男子もいるから、原岡も安心して部活に取り組めるだろう」

この後も若本の話が長く続いて、僕は職員室を出る。

「失礼しました」

と、挨拶をしてから出た。

3話

放課後。

入部届を出したので、今日は一応見学をすることにした。

華道部の部室は、校舎の2階の和室。

「ここか……」

と、僕は和室のふすまの前に立つ。

若本は、男子の部員もいると言っていたが、

本当にいるのだろうか……？

僕がふすまを開けようとしたその時。

「あれれ??行次君??」

由香里さんだった。

「入部届出してくれたの!？」

「は、はい。出しましたけど……」

「ありがとうございます!行次君も見学??」

「はい……由香里さんは?」

「私も見学よ。そこでポーと立ってないで、

行次君、行きましょう」

由香里さんは僕の手を引つ張り、ふすまを開けた。

そして僕は中を見た瞬間、一瞬魅入った。

部員の真剣な顔、花に対する情熱が、僕にまで伝わってくる。

まるで、花と戦っているかのように……

「あら。貴方たちね。華道部見学さんは。名前は……」

顧問らしき人が出てきた。

「三野由香里です!」

「え、えーと、原岡行次です。」

「そう。三野さんと原岡君ね。今日はゆっくり見学して行ってね。

私は仁藤尚美（みづな しのぶ）です。よろしくね。」

仁藤先生は笑顔で言ってくれた。

「ありがとうございます」

由香里さんがすごくいい姿勢でおじきをした。

いつもこんな風ならいいのに……。と黙ってしまっ

「ありがとうございます」

僕もそうだった。

「それじゃあ、説明もかねて案内するわね」

仁藤先生は招てくれた。

4話

「それじゃあ、説明会を始めます。」

と、和室の奥の座布団に座った。

僕と由香里さん以外にも、女子が2人、男子が1人いた。

どうやら同じ1年生らしい。

そして仁藤先生が説明を始める。

「まずお花なんだけど、この学校の華道部は、

お花を皆で持ち寄るの。個人で作品を作るのもありんだけど、

団体戦もあるわ。」

1人の女子が座布団から起立した。

「先生。団体戦って何人くらいですか？」

きのみやれいか
来宮麗華という子が聞く。

「そうね・・・4、5人で1つの作品を作るのよ。」

「ありがとうございます。」

来宮さんは満足そうに座る。

「団体戦は年に4回、個人戦は年に8回あるわ。」

それと、お花は、季節ごとに持ち寄るものが決められているからそ

こだけは気を付けてね」

そのあと説明が続き、説明会はお開きになった。

「さあ。次は見学よ。」

仁藤先生が、部室に案内する。

さつき見た光景だった。

この人たちは、僕の先輩となる人。

チヨキパキチヨキパキというような音が聞こえてくる。

「チヨキパキなんてまるでじゃんけんみたいね〜」

と、僕の想像の邪魔をしたのは藍川美鈴。

彼女も華道部に入るみたいだ。来宮さんと一緒にいる。

2人は友だちのようだ。

「僕の邪魔をするな！」

と、言ったら、「なにを邪魔したの？」と言われそうなのでやめておこう。

僕も……こんな風に綺麗な作品を作りたい。

先輩の作品は形だけが綺麗なだけじゃない。

僕に……こんな僕にも花に対しての気持ちが伝わってくる……。

「すごいわね……。」

由香里さんも驚いている。

「はいはい。皆、手を止めて！」

仮入部で入った子の自己紹介をします」

仁藤先生が言った瞬間、先輩たちは、パツと手を止めた。

真剣だったまなざしが一気に緩んでいる。

「ふう〜。」「疲れた〜。」などと声を上げている。

「それじゃあ、その男の子から順番に、名前と好きな花を言ってもらいます」

好きな花か……。

「えっと、黒田衛くろだまむねです。好きな花は、ヤマユリです。

よろしく願います」

パチパチパチと拍手が起こる。

黒田君はヤマユリが好きなのかと、関心した。

「藍川美鈴です！好きなお花は、薔薇でえす！よろしく願います
あす！」

パチパチと小さい拍手が起こる。

まあ、そりゃこんな喋り方じゃ拍手も小さいだろう。

それに花の知識もあまりなさそうなのによく華道部に入るなあと思う。

「来宮麗華です。好きな花はベニバナです。よろしく願います」
と礼儀正しく一礼する。

藍川さんと違って来宮さんは本当に礼儀正しい人だと思う。

なんで藍川さんなんかと一緒にいるんだろうと思う。

「三野由香里です。好きな花はホトトギスです。名前もお花も大好きです！」

ホトトギスカ・・・。

なんかどこかでよく聞く花だなあと思った。

最後は僕の番だ。

「原岡行次です。好きな花・・・というか植物というか・・・は、紅葉です。紅葉の中でも相合笹が好きです。よろしくお願いします」
こうして、僕の自己紹介が終わったあと、部活は解散した。

5話

帰り道。

僕は由香里さんと夕暮れの空に囲まれて、歩いていた。もう6時50分なのに、まだ暗くない。

由香里さんが口を開く。

「意外ね。行次君が、紅葉好きだなんて。

私は、相合笹もいいと思うけど、やっぱり曙だわ。普通に。」

曙は赤く、よく見る紅葉だ。

「そういえば、明日は実際に花を生けるんですね」
僕は話をそらす。

紅葉の話なんか続くわけもない。

「そうね。行次君はどんなお花を持っていくの？」

「僕は、自然らしい花が好きなので、桜を持っていきます。
春だし……」

「あら！それじゃあこれを是非使って！」

由香里さんがバッグの中の袋を取り出し、

中を開けると、朝僕が見つけた桜『陽光』だった。

「行次君が朝くれた陽光よ。よかったら使って。」

朝くれて言ったくせに……。

まあいつかと思った。

「ありがとうございます。」

といて、僕らは分かれ道で別れた。

家で。

「行次く。ご飯よ」

下から母さんの声がする。

僕はヘッドフォンを外し、読んでいた漫画を片付けた。

僕は階段を駆け下りる。

リビングに行くと、父さん、母さん、小6の弟が待っていた。今日のごはんは、鮭の塩焼き、味噌汁、ごはん、キャベツのサラダのようだ。

「いただきます」とあいさつをして食べ始める。

全員そろって食べないといけないのがこの家のルール。

父さんが僕に語りかけた。

「行次、高校はどうだ。」

いつもこんな質問ばかりに飽いている。

「うん。楽しい」

と、適当に答える僕。

「そうか。よかったな。西宮は高卒でも就職率は高いと言われてい
るし、

いい学校に入ったな。行次。」

確かに西宮高校はこころ辺では名が知れている、レベルの高い高校。
就職できる確率は95%と、かなり・・・というかすごく高い。

こんな高校がよくあるなと思った。

夕食を食べ終えて、僕は2階に上がった。

自分の部屋に行き、ベランダに出た。

空を見ると今日は真っ黒な空だった。

「明日雨でも降りそうだな・・・」

そう言い、ベランダに置いていた由香里さんからもらった陽光を手に
持ち、部屋に持ち入った。

ガラガラとベランダを閉めた。

僕は陽光を眺めた。

こんなに濃いピンクの桜を見たのは、初めてだ。

しかし明日どうしよう。

作品を作るとか言っても、陽光をどう生けるか・・・。

僕は、散歩に出かけることにした。

「散歩いつてきます。」

と、母さんに声をかける、

「え？こんな時間に？」

「うん。ちよつとね」

「いってらっしゃい」

「いってきます」

僕は散歩に出た。

6話

散歩道。

春だから夜はなんとなく温かい。

「なんかいい花ないかな……。あ。」

僕は、アスファルトで、たんぽぽを見つけた。
たんぽぽと桜なんてどうだろうか……。

春の花同士、相性が合うのではないだろうか、
そう思いつつ、たんぽぽを摘んだ。

「たんぽぽの草も摘んでおこう」と、

僕は、草も摘んだ。

そろそろ家に帰ろうとしたとき。

僕の前に人影が見えた。

見覚えがある。

由香里さんではなく……。

来宮さんだ！

こんな遅くに1人で何をしているのだろうか……。

近づいてみると、彼女も僕と同じ、花を摘んでいた。

それも2かごも。

なぜ2かごもいるのだろうか……。

と、そこへ。

来宮さんのところに、人影が現れた。

あれは……。

藍川さんだ！

まさか……。まさか……。いや、そんなわけがない。

「あんだ、花摘めたの？」

「こ、これだけ摘めました」

学校では仲良しなのに、なぜ、こんなに口調が違うんだ!?

「あんださー、いくら家が貧乏だからって、

こんな花はないでしょお?」

藍川さんはかごをひっくり返し、かごの中身を踏みつける。

グシャグシャグシャ。

「・・・っ!」

来宮さんは絶句している。

それはそうだろう。

藍川さ・・・いや、あいつには心がない!!

「でも仕方ないよねえ。借金であんたのお父様の会社、つぶれて、豪邸暮らしからポロアパート暮らしになっちゃったんだから、

お花なんて買えないわよねえ〜元お嬢様!

借金先があたしのお父様の暴力団の藍川組でよかったわね〜。

あたしに絶対逆らわなければ、借金は払わなくて済んで、家系も楽になるわよね。」

そういうことだったのか・・・。

だから、来宮さんと藍川は一緒にいたのか・・・。

来宮さんはずっと脅されていて、

一緒にいるしかなかったのか・・・。

でも、花を踏みつぶすのは許せない。

花も・・・来宮さんも助けなきゃ・・・!!

「やめろ!!」

僕は藍川の方へ向かう。

「きゃっ!」

僕は藍川を殴った。

藍川はほおに手を当てて、僕をにらんだ。

「なにをするの!?!?・・・というかあんた・・・華道部の人よね!?!? 何で殴るのよ!」

「うるさい!お前には心つてもものがないのか!

普通に人を脅して、普通に花を踏みつぶす!

花には罪はないだろう!!人を脅すなんて、恐喝罪になるぞ!!」

「これくらい俺にだって倒せるぜ！」

「おりゃおりゃ」

黒ずくめは僕を殴ったりけったりする。

「もう・・・やめて・・・！」

来宮さんの叫びが聞こえる。

だけど、負けるわけにはいかない！

「うっ、ぐっ・・・！」

体力がもたない・・・。

どうすればいいんだ・・・。

そこに。

「藍川美鈴！あなたの悪事は録音したわよ！」

そう叫んだのは、なんと。

由香里さんだった。

7話

「由香里さん！？どうしてここへ・・・？」

「私の家すぐそこだから、聞こえちゃったのよ。それと、エスパー？でね。」

高1にもなつてエスパーなんか信じないっての。まあ、そんなことは後だ。

「あんたたち・・・よくも行次君を・・・。」

「なんだてめえ？」

「女は引つ込んでけ」

「このぶす！」

黒ずくめの野次が飛ぶ。

「ブスですつてえ？？もう一回言ってみろやーらあああー！」
由香里さんは、黒ずくめ1を殴る。

「ぐお！」

すごい。すごい威力だ。

「てめえ！！！」

黒ずくめ2の腹を蹴る。

「うお！」

「ひ、ひいいいい〜」

黒ずくめ3は逃げ出そうとする。

「てめえ、人の顔をブスと言ったくせによくも逃げれるな？」

おい！！！」

由香里さんはポケットから鉄球らしきものを投げつけた。

「うぎゃああああああ」

黒ずくめ全員が気絶している。

いや、死んでるんじゃないのか・・・？

脈をはかってみると、脈があったので、気絶のようだ。

「由香里さん、ありがとうございます」

「行次君・・・何でこんなむちゃな真似を・・・？」

「藍川さんが・・・花を踏みつぶしていたので、つい、カッとなってしまつて。」

藍川さんが冷や汗をかいている。

「藍川美鈴、あなたは恐喝罪の罪で、少年院に入ることになるわ。私が全て、あなたの声を録音しているもの。」

あの黒ずくめと、あなたのお父さんも、藍川組もじきになくなるし、書類送検になるわ。残念ね。」

「・・・っ!!」

藍川さんが悔しがった顔をしている。

「来宮さん、大丈夫？」

由香里さんが聞いた。

「はい、大丈夫です・・・。」

あのっ!・・・原岡君、三野さん、本当にありがとうございました。

私ずっと藍川から脅されてて・・・。藍川の指示に従わないと私の家庭は借金まみれで苦しくなつてたんです。

でも、もう大丈夫です!借金も、私がアルバイトをして地道に返していきます!」

「うんうん、頑張つてね」

由香里さんがピースサインする。

「はい・・・!」

来宮さんはすごく笑顔だった。

ちよつと経つて。

藍川美鈴は、恐喝罪で書類送検になった。

いつまで懲役かは、今後決まるそうだ。

黒ずくめの3人は、傷害罪、殺人未遂で逮捕された。

藍川の父も、恐喝罪で逮捕され、藍川組は消えた。

8話

「由香里さん、本当は家この辺じゃないんでしょう？」
僕は尋ねた。

「・・・なんでわかったの？」

「直感です。いったい誰に教えてもらってきたんですか？」

「仕方ないわねえ。・・・黒田よ。黒田衛。黒田は、藍川美鈴のこ
とを色々調べて、

来宮さんは藍川に脅されてるって推測したの。そしたら見事の中！
藍川は花に心を持ってないし、まあ、華道部からはずれてよかった
んじゃない？」

確かに、花を踏みつぶす行為は、華道部として絶対に許されない行
為だ。

に、しても噂には聞いていたけど、黒田君は情報が早いなあ・・・。

「あ、ついでに黒田衛と私はいとこなのよ。」

「そうだったんですか。それで。」

「あ、もうこんな時間。来宮さん、そろそろ家に帰らないと・・・
由香里さんが声をかけた。

でも来宮さんはその場からしゃがんだまま動かない。

「花が・・・可哀そうで・・・。」

切ない目で、藍川が踏んだ花を見ている。

由香里さんが踏みつぶされた花を拾った。

「来宮さん、あなたお花が大好きなのね。」

このお花が可哀そうだと思うのなら、

このお花を使って、明日の作品を作ったらどう？」

無茶苦茶なことをいう由香里さん。

「由香里さん、それは無茶苦・・・。」

「行次君は黙ってて！」

「はい・・・。」

「このお花だつて、見た目は死んでるように見えるけど、心は死んでいないの。だから、あなたが、この花を甦らせるのよ!」

由香里さんは踏みつぶされた花を拾つてかごにいれる。

「これで全部だわ。行次君。」

私達も、つぶれたお花を明日部活で生けましょう。」

「え!?! 僕もですか!?!」

「ええ。そうよ。あ、ついでに夕方あげた陽光も私と来宮さんにおすそ分けよろしくね」

僕は由香里さんからつぶれた花を受け取り、

由香里さんと来宮さんは2人並んで夜の道から消えた。

「たく……。でもいいか。」

僕も、家に帰ることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1810y/>

紅葉は

2011年11月14日04時58分発行